

《紹介》

『世界言語の人称代名詞とその系譜 人類言語史 5 万年の足跡』

—人称代名詞の遺伝子的背景を探求する先駆的な研究—

菅 野 憲 司

1 はじめに

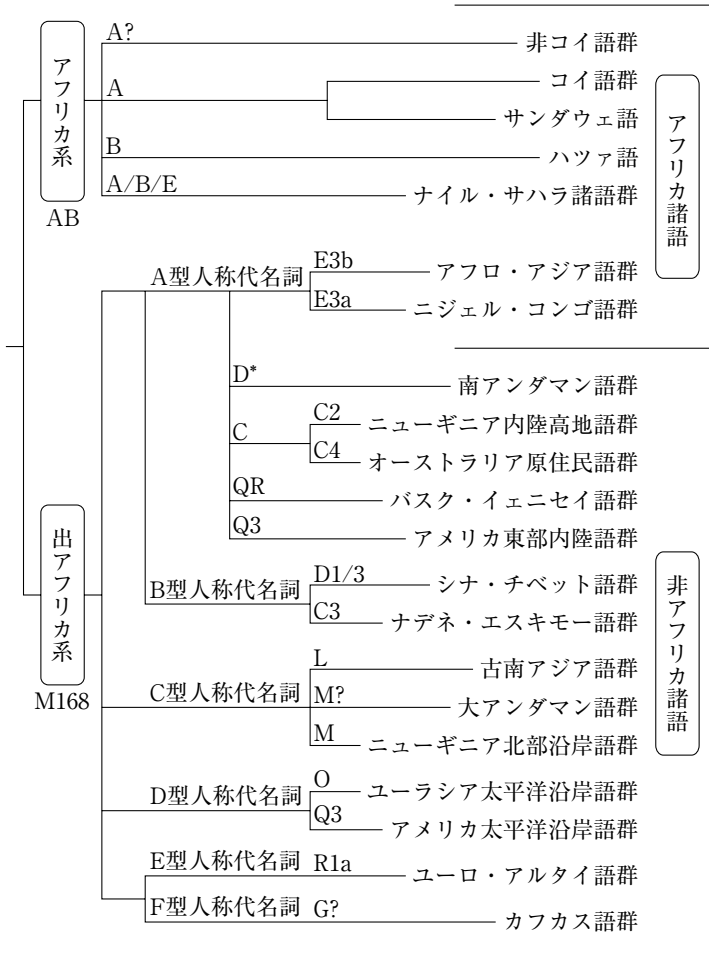
本稿の目的は、松本（2010）『世界言語の人称代名詞とその系譜 人類言語史 5 万年の足跡』を、人称代名詞の遺伝子的背景を探求する先駆的な研究として、紹介することである。

具体的には、2 節では、次頁の図、即ち松本（2010：712）の図31.1人称代名詞から見た世界諸言語の系統図を、次々頁の地図、即ち北村（編、1981）附録北村作成の前半地図である世界の言語分布概略図と対応づけながら、説明して、3 節では、松本（2010：757—760）のあとがきを中心に、松本（2010）の意義を確認し、4 節では、残された課題を指摘する。

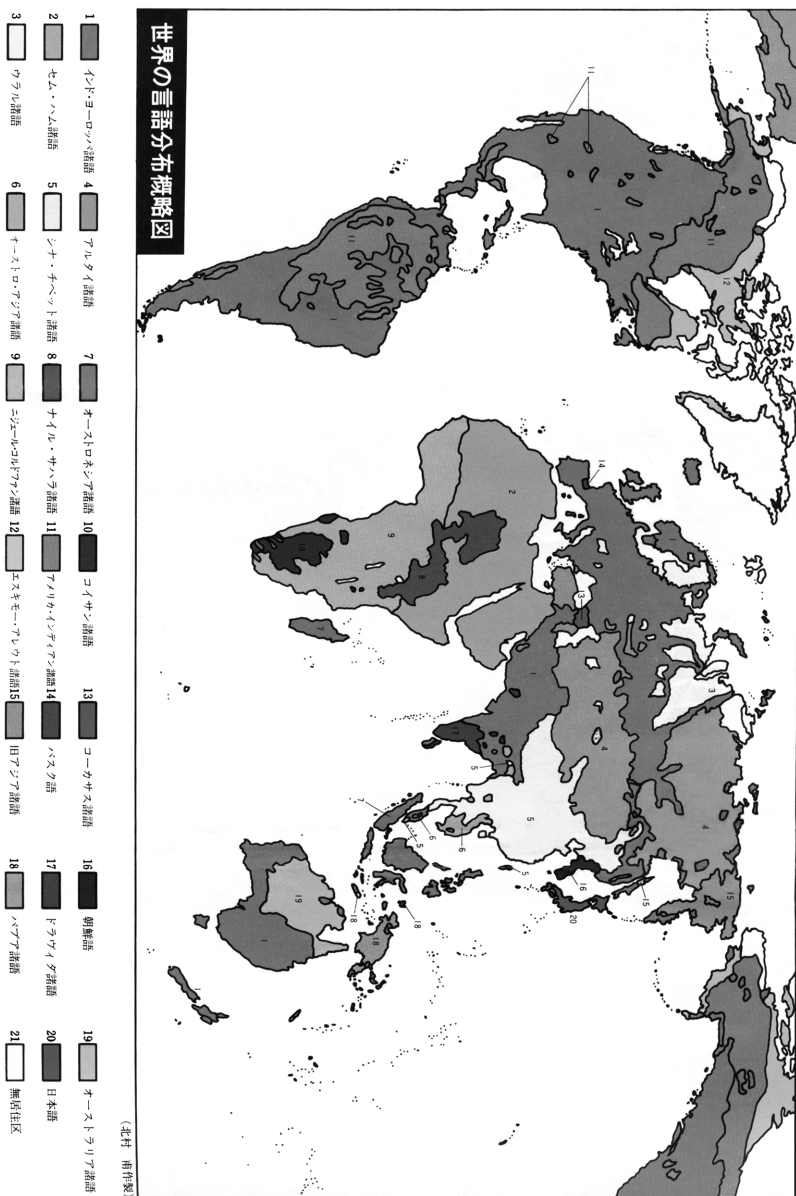
2 世界諸言語の系統と分布

世界の人口は、2011年10月末で70億を超えるとニュース報道され、世界言語の総数は、松本（2010：2）の【補注】にも書かれているように、Lewis（ed. 2009）*Ethnologue* 16版によれば、6,909で、1言語の話者数は、平均¹⁾約100万人となり、前々頁が世界諸言語の系統図であり、前頁が世界の言語部分布概略図である。

まず、アフリカ諸語が、アフリカ系と非アフリカ系に分けられ、アフリカ系は、Y染色体ではA及びB系統で、言語分布概略図の10コイサン諸語と8ナイル・サハラ諸語が主要メンバーであり、出アフリカ系のY染色体はM168をその祖型としている。



人称代名詞から見た世界諸言語の系統図（松本（2010：712）の図31. 1）



世界の言語分布概略図（北村（編、1981）附録北村作成の前半地図）

アフリカ諸語で出アフリカ系は、A型人称代名詞（1人称 n -・2人称 k -・包括（1+2）人称 t -）で、言語分布概略図では2セム・ハム諸語と9ニジェール・コルドファン諸語のほとんどすべてである。

A型人称代名詞は、アフリカ以外にも、4大陸の他3大陸全部に及び、オセアニアでは、サフル型（＝パプアA型）が言語分布概略図の18パプア諸語や19オーストラリア諸語の一部、それに南アンダマン型がインド洋上アンダマン諸島で言語分布概略図の6オーストロ・アジア諸語の極々一部、ユーラシアでは、バスク・イエニセイ型が系統的孤立言語で言語分布概略図の14バスク語そのものと、4アルタイ諸語の極々一部、そして、アメリカでは、イエニセイ型とY染色体遺伝子が同じQ系統で、南北アメリカ大陸に東部内陸型が言語分布概略図の11アメリカ・インディアン諸語にある。

B型人称代名詞（1人称 k -・2人称 n -・包括（1+2）人称 t -）は、ユーラシアでは、シナ・チベット型が言語分布概略図の5シナ・チベット諸語で、アメリカでは、ナデネ・エスキモー型が言語分布概略図の12エスキモー・アレウト諸語にある。

C型人称代名詞（1人称 t -・2人称 n -・包括（1+2）人称 m -）は、ユーラシアでは、古南アジア型が言語分布概略図の17ドラヴィダ諸語がその中心、オセアニアでは、パプアB型（スندا型）が言語分布概略図の18パプア諸語や19オーストラリア諸語をサフル型（＝パプアA型）とほぼ相補分布の関係で、大アンダマン型はインド洋上アンダマン諸島で南アンダマン型を除く言語分布概略図の6オーストロ・アジア諸語の極一部にある。

D型人称代名詞（1人称 k -/ n -・2人称 m -・包括（1+2）人称 t -/ w -）は、太平洋沿岸型に、ユーラシア大陸の太平洋沿岸部から南北アメリカ大陸の太平洋沿岸部という環太平洋に分布している。ユーラシア側の南方群は、言語分布概略図の6オーストロ・アジア諸語にミャオ・ヤオとタイ・カダイとオーストロアジアの3つの語族と、7オーストロネシア諸語の同名オーストロネシアという語族で、ユーラシア側の北方群は、4つの系統的孤立語で、言語分布概略図の20日本語と16朝鮮語はそのものであり、15旧アジア諸語にギリヤーク語が含まれ、アイヌ語は20と15にその話者を残しており²⁾、アメリカ大陸の太平洋沿岸型は、言語分布概略図の11アメリカ・

インディアン諸語の主に太平洋側で、マヤ、アステカ諸語は高度文明を築き上げた言語群である。

E型人称代名詞（1人称m・2人称t・包括（1+2）人称k-?）は、ユーロ・アルタイ型にあり、言語分布概略図の1インド・ヨーロッパ諸語、3ウラル諸語、そして4アルタイ諸語で、語族でも、インド・ヨーロッパ、ウラル、ユカギール、チェルク、モンゴル、ツングース。チュクチェ・カムチャッカ、及びカルトヴェリの8つの語族で、ユーラシアだけに分布している。

F型人称代名詞（1人称t・2人称m・包括（1+2）人称k-）は、カフカス型にあり、言語分布概略図の13コーカサス諸語そのもので、ユーラシアもユーラシア、ユーラシア内陸部の辺境カフカスの北部に限られ、孤立した残存分布である。

以上、松本（2010）の人称代名詞から見た世界諸言語の系統図が、北村（編、1981）の世界の言語分布概略図等に載せられている世界諸言語を網羅的に説明の射程に入れ、人称代名詞に注目して、アフリカ系と非アフリカ系の2大区分と、非アフリカ系人称代名詞6つの系譜を、遺伝子的背景から探求する先駆的な研究の結実であることが、確認された。

3 本書の意義

松本（2010：757—760）のあとがきは、700頁を超える大著の本文を、簡潔明瞭にまとめており、このあとがきを参考に、本稿の副題である人称代名詞の遺伝子的背景を探求する先駆的な研究という本書の意義を3点書き留めることにする。まず、第一は、考察した資料が膨大であるという点である。世界言語総数6,909の約41パーセントに当たる2,800余りの諸言語から人称代名詞のデータを収集し、その中のおよそ3分の2を議論の俎上に載せ、アフリカ、オセアニア、ユーラシア、アメリカという地域別にこの順序で配分され、少なくともこれまでに知られる主要な語族、語群、また特にユーラシアでは系統的孤立言語も、すべてその中に取り込まれているとのこと、2,800とは本学1学年学生定員より500以上も多い。

次に、第二は、言語史再建法で人称代名詞に注目して相対年代を設定し、遺伝子系統論で遺伝子の諸系統を遺伝子系統樹上に然るべく位置づけ“分子時計”に発現年代を算定している点である。人称代名詞によって順序が決まり、遺伝子によって年代が決まり、人類言語史5万年の足跡は、年表の体を成したのであり、そのまとめが上記人称代名詞から見た世界諸言語の系統図とすることができる。

そして、第三は、アフリカ、オセアニア、ユーラシア、アメリカの4地域にわたって、従来の学説と大きく異なる論点を提示している点である。アフリカでは、「アフロ・アジア」、「ニジュール・コンゴ」、「ナイル・サハラ」、「コイサン」という従来の4語族分類を、「トランス・アフリカ」という大規模語群とそれ以外の群小語群とする2大分類にし、「トランス・アフリカ」を構成するのはニジュール・コンゴとアフロ・アジアという2大語族で、それ以外の群小語群にはコイサンとナイル・サハラとしてまとめられてきた諸言語である。

オセアニアでは、人称代名詞のパプアA型とパプアB型に対応する「内陸高地語群」と「北部沿岸語群」という2大語群にパプア諸語全体を分け、前者は更にパプアA型の共有によって、かつてサフル大陸に属していたオーストラリア原住民諸語の全体と同系関係で結ばれている。

ユーラシアでは、松本（2007）に追加する成果として、ニハーリー語、クスンダ語、ブルシャスキー語という南アジア残存する3つの孤立言語が、人称代名詞古南アジア型の共有によってドラヴィダ諸語と同じ系統関係で結ばれ、また、ヨーロッパのバスク語と西シベリアのケット語は、バスク・イエニセイ型の人称代名詞を共有する。やはり松本（2007）の成果である太平洋沿岸型人称代名詞を共有する日本語、朝鮮語、アイヌ語、ギリヤーク語と同様に、ユーラシアには真の意味での系統的孤立語が存在しない。

アメリカでは、グリーンバークによる「エスキモー」、「ナデネ」、「アメリンド」という3区分説を、同じ3分説でも、「アメリンド」を「太平洋岸系」と「東部内陸系」に分けて、「エスキモー」と「ナデナ」に他若干の北米諸語を加えた「ナデナ・エスキモー系」を入れて、アメリカ大陸への人類移住のそれぞれの時期とルートを異にする3つの段階を反映している。

副題である人称代名詞の遺伝子的背景を探求する先駆的な研究という本書の意義を、特に再確認するならば、上記第二点の人称代名詞によって順序が決まり、遺伝子によって年代が決まり、人類言語史5万年の足跡は、年表の体を成したという箇所を繰り返しておく。

4 残された課題

前節の意義3点に沿って、残された課題を記すことにする。第一の考察した資料が膨大という点は、言語普遍性の考察で、チョムスキーは深いが狭い、グリーンバーグは広いが浅いと、一長一短を言われるのになぞらえれば、資料の質は再確認に値しよう³⁾。

第二の前節最後の段落で繰り返された下線部分について、人称代名詞による相対年代と遺伝子による発現年代は、相対と絶対という両輪で、両者両方の精緻さはどんなに求められても求められすぎることはない。

第三のユーラシアで系統的孤立語が存在しないという点に関して、松本(2006)でも松本(2007)でも指摘にも及ばなかったバスク語とケット語のバスク・イエニセイ型人称代名詞共有が、カフカス諸語とは無関連であるのか否か、言語学者の興味は尽きることがなさそうである。

注

- 1) この【補注】でも触れられている通り、世界言語総数はGordon (ed. 2005) *Ethnologue* 15版では6,912で、*Ethnologue*の登録言語数が減少したのは初版以来初めてのことで、危機に瀕する諸言語への取り組みがより緊急性を増すとともに、人口増加も考慮すると、平均話者数は微増していることにもなるう。
- 2) 日本語、朝鮮語、アイヌ語、ギリヤーク語が、言語概略地図等で一つのグループを成すと言うこともできよう。
- 3) 2011年10月12日(水)午後に、著名なアイヌ語研究者コペンハーゲン大学のキーステン・レフシング先生と本学関係者複数と昼食の機会の折、本書を見て頂いて、「資料の質が問題でしょう。」とのご感想を頂戴している。

参考文献

Gordon (ed. 2005) *Ethnologue: languages of the world*, 15th edition.

北村甫（編、1981）『世界の言語』東京：大修館書店。

Lewis (ed. 2009) *Ethnologue: languages of the world*, 16th edition.

松本克己（2006）『世界言語への視座：歴史言語学と言語類型論』東京：三省堂。

松本克己（2007）『世界言語の中の日本語：日本語系統論への新たな地平』東京：三省堂。

松本克己（2010）『世界言語の人称代名詞とその系譜 人類言語史 5 万年の足跡』東京：三省堂。